

首都圏 繁盛記

第6部 上野東京ライン ③

大正時代、湖畔の静寂な景観に魅了された白樺派の文人たちが移り住み、「北の鎌倉」と呼ばれた千葉県我孫子市。だが高度経済成長期に排水によって手賀沼(てがぬま)が汚染され、全国最低の水質を記録、美しい湖畔のイメージは失われた。地元は環境を取り戻すため多くの時間を割いた。上野東京ライン開通を追い風に「ヨットと文学の町」として人を呼び寄せる潮流も生まれた。

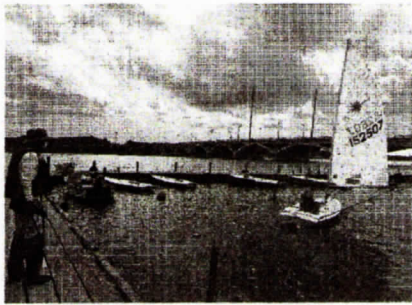
10日、梅雨の合間の晴れた空の下で3艘(さんぶつ)のヨットが優雅に弧を描いて帆走する。柳宗悦や志賀直哉、武者小路実篤といった文人たちが舟を浮かべ、将来の夢につい

て語り合ったとされる手賀沼湖畔。近年は柏市など周辺からヨットを乗しむ人が増えている。

退職後にヨット

担い手は退職後の余暇を楽しまたいシニア層。7年前から始めた島村英暢(えいちょう)さん(72)

我孫子「湖の街」もう一度



手賀沼ではヨットを楽しむアクティブシニアが増えている(千葉県我孫子市)

手賀沼を浄化シニア憩う

その一人だ。所属するNPO法人アルバトロスはヨットクラブには現在60人以上が在籍し、平均年齢は65歳。「沼の周囲の橋や建物に当たった風が複雑な動きを生み出す(島村さん)ため、初心者だけでなく上級者でも楽しめるという。4〜11月のシーズンで我孫子駅から東京駅ま

でが直通で結ばれた。誘客を目的に我孫子市が作った映像CMでは、手賀沼湖畔をヨットやカヌーが走る姿を映し出す。CMは上空から撮影し、7月上旬から東京メトロ全線です。撮影にはNPO法人、手賀沼フィルムコミッションも協力し、ロケ誘致に注力する。手賀沼は人口急増の影響で大量の生活排水が流れ込み、汚染が進行。1974年度からほぼ四半世紀、国の測定で全国最低

湖群のまちとして印象づけたい(市あびこの魅力発信室)。創作の場として文人をひき付ける趣も残る。まど・みちお以来、日本人2人目の国際アンデルセン賞・作家賞を受賞した上橋菜穂子さんも我孫子を拠点に活動。15年の「本屋大賞」となった長編小説「鹿の王」ではあとがきに「我孫子にて」の一文を添え、市長との対談でも魅力を語った。



景観を生かしたロケ誘致にも力を入れる。別荘跡地が立ち並ぶ通りにある杉村楚人冠(そじゅんかん)記念館。杉村は明治から昭和にかけて活躍したジャーナリストで、市の住民との交流などを随筆「湖畔吟」につづった。人気グループ「嵐」の相葉雅紀さんが出演した映画の撮影に使われたことで女性客の来訪が増え「にきわいが生まれた」(高木大祐学芸員)という。文藝たちが愛した場所は姿を変え、新しい来訪者を迎え入れている。(佐藤初姫)